14－10

　深夜のホテルオークラでの別れ際に、お互い稀有な事例だったけれど必要に迫られて、真紀と辰巳は携帯番号を交換していた。
　車が横川ＳＡを出て佐久平に差し掛かったところで、真紀から電話があった。
　ひと通りの会話が済むと、辰巳はカーナビに表示された到着予定時刻をＪ課長に確認してから真紀に伝えた。
「道路の混み具合から言って、予定時刻を上回ると思うがね。………いや、私が行きたいから決めたことだからーー………わかったわかった。………白のトヨタプリウス。………社名など入れていない。………目立たない方がいいに決まっているさ。………出迎えなんかいらないから。………何かあったら、こちらから連絡する」
　電話を切った辰巳は、バックミラーのＪ課長と顔を合わせて微妙な笑みを浮かべた。
　更埴ＪＣＴで降りて数分後に千曲川に架かる千曲橋を渡り、県道７７号線をしばらく走ると山の手へ上って行った。
　緩やかなカーブのあちらこちらにリンゴ畑があり、手の届きそうなところに深紅色の実を付けていた。
「信州に来たなと感じるね。見事な赤色を見せているが、何という品種だろう」と辰巳は窓外の景色に目を細めてひとりごちた。
　すれ違いができる場所に車を止めたＪ課長は、２カ月前に機種変更したばかりの iPhone 3GS を操作して、「秋映（あきばえ）と言って長野県のオリジナル品種だそうです」とインターネット検索した内容を報告した。
「ちょっと良いかね」と部下を促した辰巳はアイフォンを手渡してもらった。「ソフトバンクの孫さんが（鳥肌が立つほど感動した）とか（人生観を変えたほうがいい）とか言っていた鳴り物入りの新製品だね」とさらりと情報通を口にした。
　支店長の都合で重責を担う羽目になったＪ課長は、プレッシャーを無事乗り切るために、思いを巡らせていたが、数時間にわたり二人きりで過ごしているうちに、辰巳社長の人間力に自然と引き寄せられていた。
　数寄屋造りの売店用に設けられた駐車場に白のプリウスが止まると、連休でそこそこ賑わっている観光客を避けながら白衣の女が急ぎ足で近づいてきた。
　車から降りた二人の男に向かって、４０代の面長ですっきりした顔立ちの女は、不安の色を見せながら尋ねた。
「不躾ながら私、W酒造の杜氏をしております堀内麻里子と申します。失礼かとは存じますが、H酒造のお方でいらっしゃいますか」
「……はい。しかし、素早いご対応ですね」
　Ｊ課長は辰巳と顔を見合わせて言った。